

丹吉右衛門物語の前に一寸尋ねたひのは孫の主税良兼は無事にもあるか夫だけはどうぞ話して聞かして下さい石どうも此所も然う話の腰を折て孫の様子が聞たいの何のと云すと吉右衛門名々のいふ事に構はず其の跡は何うした吉左様でおさいます矢ノ倉の服部殿方にて待合せを致しました何が何分雪は盛んに降ります掘部安兵衛殿の御働らきで本所一ツ目の角楠屋源助と申す若葉切を商あう家の二階が大層廣いといふので此の楠屋を借切り致して置きました何が安兵衛殿の事でごさいますから仙台の屋敷へ御手子に奉公をしたと指らへ仲間を呼んで振舞をする亭主の源助へ申込んで置たさうで合います石成程兩國といふ長橋を隔て居ては何だか不都合ソコで橋を越して本所一ツ目に會合して居るとは實に手配

りも行届いたものだよし阿父さん貴所が何んを事を仰しやるもので吉右衛門の話の腰が折れます黙つて御聞あさい石是は恐入た今度乃公が叱られた吉右衛門構はずにやつてお呉れ直左様から御物語りを致しますゆゑいとぞ宜しく御聞濟みを願ひますと坐の半場に扣けた寺坂吉右衛門房子を取て身を固め直扱も其夜は極月の中の四日夜討の勝負は兼ての計略打立つ時刻はほの暗き邊りの村木へ降り積る雪の明りは味方の松明鏡り襦袢に身を固め小手懸當ては覺の手の内鏡り頭巾を頭に頂だき皆一様の出立にて地黒の半段だら筋白き木綿の袖印白山足袋に武者草鞋金の短冊襟に附け表は元祿十五年極月中の四日主人の爲に討死すと記し裏を返せば播州赤穂の前城主淺野内匠頭家臣何某と姓名記し投鎌投槍投階子大弓半弓管槍手槍中にも堀部大高は得手たる撥を引抱に手

傳士義七十四

もなく砕く裏表御門徹座に砕くを幸はい、一度にハツと込入た
り大高堀部武林若手は矢藤右衛門七殿、松村吉田が一番に市田
岡島不破小野寺岡野手綱に富の森、嶺く三番原菅谷間、磯貝倉林
早水四番はひて七人組奥田前原矢田木村物數あらぬ此の奴大
府様の御下知を受け表門より込入りたり、玄關書院大間數修羅の
街ど火花を散らし又搦め手は若旦那主祝様、後見吉田忠右衛門
同じ床木の下の勇戦、搦めて寄たる潮田貝賀、片岡神崎與五郎殿
三番三村近松は横川茅野赤垣等の面々は弓矢の花と切結ぶ魁け
好む四番手には八間もあらせず間瀬の切先中を隔てた中村に
操正しき村松の老木の色も若返り鋸を削る太刀に風表裏合せ
て四十餘人上野様の御印を頂戴あさんと込入りたり、油断大敵上
杉の附人なりとて、御自慢の榊原鳥居小林和久清水筋鉄入た

傳士義七十四

る鉢巻に鎖こ帷子用意の得物浪人共の鎧刀と高言はいて切入
れば、テモ面白と堀部が魁、大高岡島片岡氏中に貫でし武林、鏡
さ太刀風、不破神崎此の面々に切り立られ、さしにも勇む附人も
枕を並べて討死せり、其の外刀の目釘の續くだけ勝負をいたし
四十餘人の内、少しは手疵を受けられども過まちなし勝負ハ時
の上刻より虎の頭、に畢んぬども卑怯未練の上野之介命借みの
憶病者、何處へ逃ししか行方知れず、年頃日頃恨みの仇、此所よ彼所
と尋ねる中、天道なきか哀れみ玉はん、忽ち引出す忠雄が勇力
槍先き鏡とさき間新六第一番に槍を附け、其の儘廣間へ連れ來り
御城代より上野へ意恨の次第を述べられて終には其の場に首
を討ち互ひの宿望遂げたる時、大石様をはじめとして我々共に
至るまで餘りの嬉しさ重ありて暫らく言葉もなかりけり」と息
つきあへず寺坂が物語りをば聞居たる石齋はじめ一同は互ひ

傳士義七十四

に顔を見合せて暫し詞もあかりけり

第十七席

吉右工門物語りの間に御老母は冷光院殿御位牌に向ひ
様にも泉下に於て御満足に思召され下し置れまするやう
藏介はじめ下人等一同御高恩を思へばこそ御無念を御相續申
し去月十四日仇討をいたしたりと承たまはり老の身の喜み
其の上もあくと跡は言葉も出ぬ位嬉しさは先立ち又悲しさを
思ひ出だし孫主税の顔も此の世にては見る事があらぬかと内
藏介の事はいはす只夢に孫を愛すの情でおざります藍は藍
り出で、猶青し氷は水より出で、水より冷やかどやらの造
りまするものでございませうが孫の可愛いとふ情は又別段
と見ねまして御老母には涙にむせびまする様子此の時寺坂吉
右工門物語り畢るが否既に差添を引抜き腹を差さんとする様

傳士義七十四

子に石齋確と取押へ石吉右工門何ゆえ此の場に切腹いたす
か吉何故とは御情ある御城代の御詞にも必らず冷光院様御
靈前へ首を供はた曉きは切腹いたせと仰せられ又獄中も切腹
の覺悟は固より身分輕しといひながら吉右工門生き残りまし
ては御城代初め名々へ對し恐れ入りますれば常今席を拜借い
たし此の場に於て切腹仕つり度う存じます大吉右衛門爺腹
を切るの止して瓜を上るから供をいたして呉れ千爺切腹
を致さずとも此の豊岡に暫らく居れよ吉稚子様方が其のや
うに物柔らかに仰せ下さるだけ却つて吉右衛門恐れ入ります
石吉右衛門其方は存外の不忠者だも吉何と御隠居仰せられ
ます吉右衛門を不忠者とは近頃御情あり石不忠に相違ない
内藏介の采配にて本懐成就いたしたる曉き其の場より其方に
斯る使ひを申附たるは世の中に存生て御老母や吉千代大三の

傳士義七十四

事を頼むといふの内蔵介が心の中に相違ない殊更に内蔵介初
め黨中の處分未だ如何相成りしか分らざるのに早まつて切腹
いたした其の後に若し格別の思召しにて一同の者助命仰付ら
れたる時は如何いたす死を急ぐのは勇士でない假令内蔵介初
め切腹いたすと承たまはりなば猶名々の供養をして殘る老母
や孫をもへ志しを尽する死に増る忠義と申すべし又其方も
妻子の事を思はぬか吉赤穂離散の其の時に妻は離別娘は勤
當無一物とあつて御供をいたした某しあれば今更妻子の事を
省りみまする心は更にござりません石サア離別いたさばど
て御供を致して仇討の本懐遂げたる上からは是とも元の如
く夫婦にあつて片々の追善供養をして遣はせよし旦那様は
代り私より切腹の義は留まするぞ母よしの申す通り内蔵介
に代り又私は冷光院様に代つて吉右衛門切腹の義は留する存

傳士義七十四

生て此上とも忠義を立て呉れらるやうにと御母堂の御一言
石齋殿の信義の言葉に今は切腹も致し兼ね抜いたる劍を鞘に
をさめ吉借から取命ながら此の場で死なば御當家へ御迷惑
を感るも同様又御老母様の御一言與様の御言葉といひ仰せに
従がひ此の上は皆々様の様子聞き次第に依たら吉右衛門
頂黒衣の姿にあり菩提を吊らうやうに仕つります石開分け
て呉れたか吉右衛門此の上は便りを求め妻子を招いで暫らく
は此の豊岡に暮すやうに致せと仰せられたので吉右衛門も其
の意に従がひまして茲で暫らく但馬の豊岡に居ります中に
播州赤穂塩濱の名主又四郎方に妻子の居る様子が相分りまし
て之を招いで元の如く夫婦にありましたのは後の事ござい
ます其の内元禄十六年二月二日に何れも切腹仰せ附られ遣
骸は高輪泉岳寺へをさめました併し其の時直に只今のやうな

傳士義七十四

捕つた石塔を立ましたのではございませぬホンの墓碑だけで
ございましてたのを入代の將軍吉宗公の御世に其の志しを思召
され御老中土屋相模守殿へ仰せ附られ初めて石塔が出来まし
たのでございませぬ吉右衛門は名々切腹のよしを但馬の豊岡で
承たまはり實に其の嘆きは一通りでおさいませぬあれども名
々の意見に従がひ内藏介殿妻子の手許に暫らく居りました其
後藤州家へ吉右衛門の存命いたし居ります事相分りました
て松平安藝守殿より御招ぎに相成り御本家へ御召抱に知行入
十石を頂戴いたし其の中御加増を頂だき二百石とまで出世を
致され藤州家に寺坂吉右衛門の跡は獲つて居ります一説に吉
千代は後藤州家へ御呼寄せに相成り藤州に大石の跡を残した
と申す説もございませぬ是は實説のやうに思ひます先は寺坂
吉右衛門二度目の清書は是にて讀切りでございませぬ

傳士義七十四

扱是まで文事堂主人の望みに應じ四十七士傳も十巻とまで号
を繼いで深かじめ申上ましたが間瀬久太夫、間喜兵衛、早水藤左衛
門、奥田孫太夫、大石瀬左衛門、奥田宗右衛門、間瀬孫九郎、茅野和助
三村次郎右衛門、小野寺幸右衛門、間新六、貝賀彌左衛門等の人に
付ては別段に傳記といふほどのものもおさいませぬゆゑ只名
々の成行だけを申上て是にて大團圓を告まする私しも講談師
として暫らく此の業に居りましたが幸はひにして四十七士傳
を現はすといふのは自分の名譽におさいませぬ此の上も諸君
の御愛顧を只管に願ひ奉つりませぬ川柳にも講談師見て来た
やうな嘘を吐きと悪口はございませぬが家康公の御詞にも偽は
りに似たる眞は云ふべからず眞に似たる偽はりにて人の害に
あらざる事は虚々々々は世の中の常でございませぬ何事も大
いませれば虚々々々は世の中の常でございませぬ何事も大

様に御讀み取を願ひます
世渡りの嘘や月雪花にまで

赤穂義士 四十七士傳十卷終

明治二十九年十二月二十七日印刷
明治二十九年十二月三十一日發行

(四十七義士傳卷十)

東京市淺草公園六區三號百四

桃川燕林事

講演者

蘆野萬吉

東京市日本橋區藥研堀町四番地

速記者

今村次郎

東京市神田區佐久間町三丁目卅八番地

發行者

市川路周

東京市神田區柳原河岸第十四號地

印刷者

龍雲堂 大場沃美

東京市神田區佐久間町三丁目卅八番地

發行所

文事堂

版權所有



